

## 徐霞客遊記訳注稿 散文篇(一)

—「溯江紀源」—

薄井 俊 二一 埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：徐霞客遊記、溯江紀源、江源、龍脈

### はじめに

徐霞客は遊記の他に、何篇かの散文作品を残しているが、そのひとつに「溯江紀源」がある。内容の詳細は、後の訳注に譲るが、長江を溯つてその江源を探索した成果を踏まえて、黄河と長江という二大河川の全体像と優劣を論ずるものである。また風水説とも通じる「三大龍脈」についても論ずるものとなっている。

本稿は、この「溯江紀源」について簡単な書誌的な検討を加えた上で、その訳注を試みるものである。

まず「溯江紀源」について基礎的な検討を加え、その後に訳注を施す<sup>(1)</sup>。その後本篇を理解する前提となる知識として、黄河の河道の変遷について「補説その一」としてまとめ、さらに徐霞客に先行して「龍脈」に言及した、王士性の「地脉」の一文の訳注を「補説その二」として掲げた。

### 一 「溯江紀源」について

「溯江紀源」の撰述年次は明らかではないが、徐霞客の二つの伝記では、この書が西南遊終わり頃以降のものだという。

陳函輝の「霞客徐先生墓志銘」(以下「墓志銘」)<sup>(2)</sup>では、霞客が西南遊の期間中、峨眉山の手前から彼に手紙をよこしたとし、その折り、錢謙益へも書を託したという。そしてその内容として「溯江紀源」と同じ文章を二節引いている。そして、かくして「溯江紀源」一篇を著したとする。また錢謙益の「徐霞客伝」<sup>(3)</sup>では、やはり峨眉山下から「溯江紀源」一篇を錢に送ってきたとしてその概要を述べる。この二つの伝記は、内容的にいささか信頼性に欠くところがないではないが、徐霞客に非常に近い人によつて、没後すぐに書かれたものとして、やはり貴重であろう。現在の形の「溯江紀源」となったのは、江陰扁郷後であったとしても、少なくとも、「溯江紀源」の内容をほぼ備えたものが西南遊の終わりにはできており、それを錢謙益等に送ったのであろう。

また「溯江紀源」は、崇禎十三年(一六四〇)に刊行された「崇禎」江陰県志」に引用されており、それ以前には完成していたこと

になる。

以上の検討から、「溯江紀源」は、徐霞客の西南遊の終わり頃の、崇禎十二年（一六三九）から翌十三年くらいにかけて撰述されたものと判断される。

「溯江紀源」のテキストは、崇禎十三年刊行の「崇禎」江陰県志」所収のものが、確認できるものとしては最も古いものとなる<sup>4</sup>。自注を含んで約一三〇〇字あまりの小篇である。その翌年の同十四年（一六四一）に徐霞客が逝去。さらにその翌年の同十五年に埋葬されるが、その折りに書かれた陳函輝の「墓志銘」に、「溯江紀源」への言及と引用がある。さらにその翌年の同十六年に錢謙益の初めの文集である「牧齋初學集」が刊行されているが、そこには「徐霞客伝」を収録する。この伝記の中でも、「溯江紀源」への言及と内容の概要が述べられている。その翌年の同十七年に明朝は瓦解する。

「徐霞客遊記」の刊本が初めて刊行されるのは清朝に入ってからである（乾隆刊本）。乾隆四十一年（一七七六）のことで、徐霞客没後、一三五年後のことである。その最初の刊本には「江源考」という別名で「溯江紀源」が附載されている。本文は、「崇禎」江陰県志」所収のものとはほぼ同じである。乾隆期の刊行に至る間は抄本という形で「徐霞客遊記」は伝えられたのだが、それらにも「溯江紀源」が附載されていたかどうかは不明である。しかし、「崇禎」江陰県志」所収のものと乾隆刊本のものとはほぼ同じであることから、原文をほぼ留めた形で伝承されていたものと考えられる。

## 二 溯江紀源訳注（稿）

### 凡例

- ・「崇禎」江陰県志」所収のものを底本とした（「崇禎本県志」と略）。
- ・崇禎本県志は、影印版で見ることができているが、残念なことに、最も綴じ代に近い一部が欠けている。
- ・前記の欠損部分も含めて、以下の二点を校勘の材料とした。
- ・「徐霞客遊記」所収。褚紹唐吳王壽整理、一九八〇刊、上海古籍出版社本（「上海本遊記」と略）。
- ・「光緒」江陰県志」所収。光緒四年（一八七八）刊（「光緒本県志」と略）。「芸文・雜著」に本文と自注の一部を収録。
- ・徐霞客の自注は「」で示した。
- ・原文にはないが読みやすさを考慮して補ったものを（）で示した。
- ・「崇禎本県志」では、卷一山川「大川」の項の末尾に「溯江紀源」を掲載するが、本文の前に馮士仁の序文があり、本文の後に跋文がある。この跋文は無署名だが、文意からして馮士仁のものと考えられる。これを「跋文その一」とした。
- ・「徐霞客遊記」所収の方は、本文の前に「馮士仁曰」の四文字に続けて序文が続き、本文の後に陳体静の跋文がある。これを「跋文その二」とした。
- ・本訳注では、崇禎本県志の体裁に倣い、馮士仁の序文、本文、跋文その一を載せ、更にその後には跋文その二を載せた。
- ・本文は、内容から九節に分けた。
- ・解説には、次の諸書を参照した。

盧永康・禹志雲校注『徐霞客散文校注』雲南人民出版社、一九九

七「散文校注」と略

黄坤注訳『新訳徐霞客遊記』三民書局、二〇〇二（「新訳」と略）

(一) 題目

溯江紀源

●校勘記

〔溯江紀源〕…上海本遊記では、続けて「一作「江源考」」を載せる。

(二) 序文（馮士仁）

長江の河源を論ずるものは、長らく『禹貢』の「岷山から長江を導びいた」の説を踏襲してきた。江陰の近くに住む、徐弘祖（字は霞客）は、若い頃から遠い地を遊覧するのを好み、長江の河源を考究しようと思っていた。そして崇禎九年（一六三六）夏、家を辞して遠い流砂の地へと出かけ、同十三年（一六四〇）秋に至り故郷へ帰ってきた。その旅程は十万里に及び、日程は四年間に及んだ。そこで实地調査して記されていることは、彼自身が足を運び、目で見ることによってこれも補われているもので、まったく桑乾の「水経」と、酈道元の「水経注」の書ききれなかったことを補うものである。そしてここ江陰の地は、長江の末端に当たる。私は県志の山川の部を著述していたのだが、ちょうどそこへ徐霞客先生が帰ってこられ、「溯江紀源」の一書を書かれた。そこで、江陰県志にこれを附載し刻入することとする。

●語注

○馮士仁：生没年不詳。「崇禎」江陰県志」には「馮士仁、愚允、梁山人、進士、七年任」とあり、崇禎十三年（一六三八）まで七年間江陰知県をつとめたらしい。出身地の梁山とは、四川夔州府梁山県（今の梁平県）。光緒二十年（一八九四）刊「梁山県志」には、馮士仁の名が、庚午科（崇禎三年、一六三〇）の挙人、甲戌科（同七年、一六三四）の進士として見え、吏部文選司郎中になったとある。また「崇禎」江陰県志」巻首の纂修姓氏の中に、「纂定」として「陞兵部職方司主事江陰知県馮士仁」とあれば、江陰県知県のうち「陞兵部職方司主事」となったことがわかる。これ以外の経歴は不詳。

(三) 本文

第一節 二大河川の優劣

長江と黄河は中国の南北にある二大主幹河川であるが、それはこの二つの大河だけが大海に直接注ぐ存在だからである。私の出身地である江陰県は、ちょうど長江が海に注ぐ要衝の地にあたり、県名も長江にちなんでいるが、それはまた長江の勢いがこの地で浩大となり、さらにこの地で尽きているからである。

この地で生育する者は、大洋を眺めて長江に浮かぶが、長江の広大さは理解しているが、その流れの遠さは分かっていない。長江の流れを溯り、淵源を究めようとするものは、長江の流れの遠さは理解しているが、その淵源は四川省の岷山から発していると思つてに留まる。

私が幼いころから典籍を読んできたところでは、「黄河は積石山から中国に流れ込んでいる」（「尚書」禹貢）とあった。その源を遡及

しようとしたものには、前漢の張騫や元の都実がいた。彼らの言葉は同じではないが、だれもが「(河源は)崑崙山の北にある」という。その場所を考えてみると、岷山の西北、一万里あまりとなる。どうして長江の淵源が近くにあつて、黄河の淵源が遠くにあると言えるだろうか。どうして黄河の大きさ(長さ)が長江の倍あると言えるだろうか。

黄河は、淮河を越え、下河の古道を通つたところまで来て、そこでやつと川幅は帯程度となるのを目にすることができると言える。その広さは長江の三分の一もない。(このような黄河のありさまからすれば)長江の大なること、そこに流れ込む支流ですら、黄河におよばないことがあるのか、いや黄河に勝るものである。

関中などの黄河が流れる中国北部から、五嶺などの横たわる中国の南部まで、そして石門や金沙といった中国西部まで、つまり中国全土を全て視野に入れて初めて以下の事が分かるのだ。中国において、黄河に注ぐ河川は、省としては五つ〔陝西・山西・河南・山東・南直隸〕であること。長江に注ぐ河川は、省としては十一〔西北部は陝西から、四川・河南・湖広・南直隸であり、西南部は雲南から、貴州・広西・広東・福建・浙江である〕であること。(長江が流れる省の数は、黄河に倍する、すなわち流域面積が倍あり)、それぞれの川から分かれたり流れ込んだりする小河川の水量を考えてみると、長江は黄河の倍あることになる。長江が黄河より大であること、まことにその通りであろう。

### ● 語注

○張騫：原文は「博望侯」。將軍張騫はシルクロードを開いた(削空)

功績により、博望侯に封じられた。「漢書」卷六一本伝。○都実：元の至元十七年(一二八〇)、世祖忽必烈の命を受け、招討使となつて、黄金の虎符を帯びて、河源を探索した。「元史」地理志に「至元十七年、命都實爲招討使、佩金虎符、往求河源」とある。○黄河は：明代の黄河のありさまについては、「補説その一」参照。○五嶺：大庾嶺、越城嶺、騎田嶺、萌渚嶺、都龐嶺の総称。江西、湖南、廣東、廣西四省にまたがり、長江と沿岸部の珠江流域との分水嶺をなす。○南直隸：明代は、北京を含む河北省を北直隸とし、南京を含む江蘇省・安徽省を南直隸とした。

### 第二節 二大河川の源

両大河の源を考えてみると、黄河は崑崙山の北から発し、長江もまた崑崙山の南から発している。その遼遠さはまた同じであるといえる。北にある黄河の源は星宿海(今の青海省)という〔仏典では、「徙多河」という〕。北流して積石山を經由し、ようやく東に折れて寧夏のあたりに入り、やがて河套となる。さらに南に流れる龍門大河となつて渭水と合流する。

南にある長江の源は犁牛石という〔仏典では、「菟伽河」という〕。南流して雲南省の石門関を經由して、ようやく東に折れて麗江あたりで金沙江と名前を変える。また北に曲がつて四川省を横切る叙州の大江となり、岷江と合流する。

私思うに、岷江が成都を経て宜賓に至る距離は、一千里に及ばない。しかるに金沙江が麗江府から雲南府・烏蒙府を経て叙州府に至る距離は、合わせて一万里あまりとなる。これでは、長い距離の支流である金沙江を採用せず、短い距離の支流である岷江を長江の正統・

本流としていることになる。このようなやりかたでは、長江の淵源が黄河とは異なつて短いなどと言えるだろうか。この説の非なることは言うまでもない。

黄河の源は、これまでしばしば探索されてきた。だからその遠さというものが認識されている。長江の源はこれまでそれを探索したものがいかなかった。そこでやむなく短い方の「岷江」を本流とせざるを得なかつたのだ。実際のところ、長江に合流する岷江と、黄河に合流する渭水とは、どちらも中国では支流なのである。しかも岷江は船で遡れるが、金沙江は、異民族の居住地・溪谷に棲む異民族の間をくねくねと曲がつて流れており、水上からも陸上からも、とつてい溯ることはできないところである。

(下流の) 叙州府のものたちは、金沙江が馬湖府や烏蒙府方面から来ているのは分かっているが、その上流が雲南府や麗江府から来ているのは知らない。また(上流の) 雲南府や麗江府のものたちは、この川が金沙江であることは分かっているが、下流の叙州府で長江の始まりとされていることは知らない。

雲南省には金沙江という川がふたつある。ひとつは南流してのちに北へ転ずるもので、仏典で言うガンジス川である(いわゆる金沙江)。もうひとつは南流して海に入るもの(明代は「大金沙江」ともいった、イラワジ川)。正統年間に王靖遠が麓川を征討した際に、ミャンマー側の人々が天険の要害と恃んだのがこの川である。すなわち仏典で言う信度河である。雲南地域を記した志書類は、どれもこのふたつの金沙江が出入を異にする別々の川であることを記載せず、疑わしく混同していて、一本の川なのか二本の川なのか、北に分かれるのか南に分かれるのかを説き尽くしていない。

こういうありさまではどうして長江の源であるか否かなどを明らかにすることができようか、いやできるはずがない。」

### ● 語注

○ 仏典：本節で、仏典にある河川などに言及しているが、それらは現実の河川などとは関わりがない。

### 第三節 禹貢は治水の書にして河源の書にあらず

どれが遠くどれが近いかという根本の所を尽くさないでいて、ただ「禹貢」に「岷山より江を導く(岷山から長江「嘉陵江」を治める、疏水させる)」とあるを見て、結果長江の江源をここに帰着せしめているのである。

加えて、「禹貢」説に従う人々は、禹が行った「導」(治水)は、中国での「水害の始め(源)」を治めようとしたものであり、「河川本体の水源地」に関するものではないことが分かっている。「禹貢」では「積石から黄河を治める(導河積石)」というが、黄河の河源が積石だというわけではない。同じように「岷山から長江を治める」というのも、長江の江源を岷山だとするわけではない。岷江は長江に流入するが、その水源が長江の江源だというわけではないことは、渭水は黄河に流入するが、その水源が黄河の河源ではないのと同様である。

### 第四節 大渡河・岷江・金沙江

それだけではない。岷江の南部で合流する大渡河という川がある。西方の青藏高原から出て、四川省西部の黎州雅州あたりを経由して

岷江に合流する。長江との合流地点は、金沙江との合流地点の西北にあたる。この大渡河の源も岷江よりも遠いが、金沙江には及ばない。故に長江の水源を推し究めようとするならば、必ず金沙江を第一と考えるべきである。

#### 第五節 宋儒批判 その一——南龍岷江紀源説

それだけではない。宋儒は言う、「中国に三大龍脈がある。その中の南龍の脈は、(この説でもまた)岷山よりはじまり、長江の南岸に接近して沿い、下つて洞庭湖畔の城陵・鄱陽湖畔湖口を渡り、金陵に至る」と。この説では、大渡河と金沙江とが、南の龍脈を分断してしまうことになる、そのことが分かっていない。

#### ● 語注

○宋儒：朱子ら「氣」を物質と捉え、地上を説明しようとしたものたちを指すか。あるいは蔡元定などの風水に接近した儒者や、風水書である「地理人子須知」などの著述を指すか。「地理人子須知」巻一には、「論三大幹龍」の項があり、そこでは「朱子曰」として三大幹龍が説かれている。ただし、「地理人子須知」でその後に展開する三大幹龍の実際の箇所は、徐霞客のこの記述とは一致しない。

#### 第六節 宋儒批判 その二——長江と南龍との距離

ただこれだけではない。彼らは、城陵磯と湖口県とが、それぞれ洞庭湖と鄱陽湖という二大湖沼が長江に注ぎ入る口である、ということがよく分かっていない。洞庭湖の西の水源は湘江で、貴州省の谷芒関から発して流れてきている。南の水源は湘江で、広西の釜山(海

陽山)から発して流れてきている。鄱陽湖の南の水源は贛江で、広東の湓頭山と平遠とから発して流れてきている。東の水源は信江・豊水で、福建の漁梁山・浙江の仙霞嶺から発して流れてきている。(このように、長江へ南から注ぐ河川群がおおう水域は相当な広さとなる。南龍の脈はその水域の南を通っていることになる。つまり)南龍の脈が曲がりながら流れているところは、長江の南岸から三千里ほども離れていることになる。(宋儒がいうような)「南龍は長江に接近して沿い」などと、どうして言えようか、いやそうは言えない。

#### 第七節 宋儒批判 その三——三大龍脈説

ただこれだけではない。龍脈のことがよく分かっていないので、長江の淵源をよく理解できないのだ。(そこで)いまここで、三大龍脈の大勢を詳しく述べよう。

北の龍脈は黄河の北側で中国全体を支え、南の龍脈は長江の南側にあつて中国全体を抱え込んでいる。そして中の龍脈は南北二大龍脈の中間にあつて、最も短い。北の龍脈からは、南へ向かう短い支脈があつて中国へ入っている。「これらの説については、別に解説文を書いてある。」その中で南の龍脈だけが、氣勢が盛大で伸展し、中国全体の半ばまで達している。そして南の龍脈もまた(長江と同様)崑崙山から発しており、金沙江と並行して南下し、石門関・麗江府を経由して(東側に金沙江が、西側に蘭滄江が流れていて、両川で龍脈を挟んでいる。)滇池の南をめぐる、貴州の普定あたりから貴州南東部の地域を通り過ぎて、中国南部を横断する五嶺へと走っているのだ。

南龍は遠大であり、長江もまた遠大である。龍脈は長大であり、

その淵源からの距離もまた長大である。これが長江が黄河よりも大であるわけである。

## 第八節 南龍の支脈

それだけではない。南の龍脈は五嶺から東へ福建の漁梁山に走り、そこから南に分散して福建省付近の鼓山へ至る。東へ分出した脈は天台山・雁蕩山となる。主脈は北に転じて、小算嶺〔福建と浙江との境界〕となり、(西北に) 伸びて草坪駅〔江西と浙江との境界〕を通過し、聳え立つては、浙嶺〔徽州府と浙江との境界〕・黄山〔徽州府と寧国府との境界〕となる。さらに東に進んで叢山関〔績溪县と建平県を含む広徳州と境界〕に至り、ここで東に分出し天目山・武林山となる。主脈は北に伸びて東壩の堰をわたり、さらにそそり立つて茅山となる。かくして龍脈は向きを変えて南京で結実する。しかしその余脈はさらに東に伸びて私の故郷である江陰まで走つているのである。

### ● 語注

○小算嶺：徐霞客の「江右遊日記」に登場するが不詳。 ○草坪驛：浙江衢州府常山県の西南隅。隣の太平村は、江西玉山県。徐霞客は「江右遊日記」では、崇禎九年一〇月一七日に、実際にここを訪れている。そして「即南龍北度之脊也。其脈南自江山縣二十七都之小算嶺、西轉江西永豐東界、迤邐至此。南北俱圓峙一峯。而度處伏而不高。亦東而不闕。(南から北に延びる山脈の背である。この山脈は南の浙江・江山県の二十七都の小算嶺から発し、西に進んで江西・永豊県の東側を通り、くねくねと曲がってここに至る。背の南と北

には、円い峯が一对対峙しているが、越える背の部分は低くなつていて高くはなく、また狭まつていて幅広ではない。)」と描写している。

### ○浙嶺：不詳。

## 第九節 南龍と長江の優位性

すなわち、わが故郷の江陰は、長江が尽きるころであるのみならず、また南の龍脈が尽きるころでもあるのだ。龍脈と長江とはともに崑崙山から発し、ともに私の故郷で尽き、ここで高く聳え立つて海から長江へ入る入口の守りとなつていなのだ。かくして南京を建立し、留都を守護するものとした。永遠に落ちることのない都城としての基礎がここに築かれたのである。こうした長江のありさまは、昔は流れが北に曲がついていて碣石に注いでいたのが、今や流れを南に変えて、淮水泗水に主流を奪われてしまい、漫然と流れて「守り」の用をなしていないという黄河のありさまと同列で論じてよいであろうか。いやよいはずがない(長江と黄河とは同列では論じられない差がついている)。

こうであれば、長江が黄河よりも「大」であることは、ただ源が遠くにある(河川が長い)というだけではなく、龍脈の流れや交わりからも明らかであろう。

だから、長江の水源を探索しなければ、長江が黄河よりも「大」であることが分らない。黄河とあわせて論じなければ、長江の水源が遠いものであることが分らない。経流について談論しようとするものは、南の長江を先ず扱うべきであり、北の黄河その次に扱うべきなのである。

●語注

○留都：帝都が移転した後にも、旧都に役所を置いて守備させた。これを留都といい、明代に太祖が南京を首都とし、成祖が北京へ遷都したのちの南京を留都とした。

(三) 跋文

その一—馮士仁

徐霞客がたどった道のりは天下をあまねく被うものだ。崇禎九年の夏に、故居を辞して遠遊の旅に出て、同十三年の秋に至って遙か西域の地から帰還した。彼が検討し討論した長江の源については、自ら足を運び目で見ることを通して交互に考察したもので、まったく桑乾の「水経」と酈道元の「水経注」とを、長く空しいものにしてしまうものだった。私が県令をつとめている江陰県は長江の末端にあたる。私は県志の山川志の部分を選述してそれが完成したところ、ちょうど徐霞客が旅から帰ってきた。(そして「溯江紀源」を私に示したので)これを県志に附載することにした。

庠生である章明叙と顧孫綿が校訂にあたった。

●語注

○庠生章明叙顧孫綿：庠生は、郡・県などの地方の学校の学生。章明叙と顧孫綿は、嵩底本の編纂氏名に「纂修」として名があがっている。「溯江紀源」を含む、「山川」の部の校訂をこの二名が行ったという記録であろう。

その二—陳体静

陳体静が言う、

この「江源考(溯江紀源)」は原本は已に失われている。いまものは、馮士仁撰の本邑則ち江陰県志から転写したもので、全文ではない。先人の錢謙益は「其の書数万言」と言った。しかし、現在伝存するものは、わずかに一千余言にすぎない。「江源考」の中の「北龍亦祇南向半支入中国」に徐霞客自身が注をつけて、「俱另有説(これらの説については、別に解説文を書いてある。)」としている。その説はきつととても長いものだったのだろう。しかし一律に削除してしまっている。全く残念なことだ、と。

●語注

○陳体静：乾隆刊本の徐鎮の序文に「陳君體静再訂於後」とあり、また陳泓による「書手鈔霞客遊記後」と、同「諸本異同考略」を載せる。ここにいう陳泓は陳体静が、この跋文の撰者か。陳体静の、現存の「溯江紀源」はダイジェストであるという見解は、彼の「諸本異同考略」の「刻本邑馮志・靖邑陳志、有小引」という記述にも見え、新訳でも踏襲されている(P2704)。しかし、錢謙益の「数万言」という記述が確かなものであるかどうかは不明である。雲南滯在中の徐霞客はかなり健康を害しており、大部の著述ができる状態にはなかった。請われて撰じた「鷄足山志」は、現存するのは「鷄山志目」という目次と、メモ程度の「鷄山志略」しかない。おそらく構想はしたものの、著述を完成させるには至らなかったのではなか。徐霞客の江源に関わる他の著述である「盤江考」も、二千言程度である。「溯江紀源」は、県志所収のものがほぼ原形をとどめて



いるのではないだろうか。

### 三 補説一「明代の黄河河道について」<sup>(5)</sup>

黄河は、現在は、開封を過ぎたあたりから北東へまがり、河北の平野部を流れて渤海湾に注いでいるが（北流）、この河道がほぼ確定したのは、いまからわずか百五十年ほどまえの清末である。それ以前の黄河の河道は、山東半島の南を西南に流れ、黄海に注いでいた（南流）。

黄河はかつては北流だった。文献で流路が推測できるのは、「尚書」禹貢など戦国時代の作と思われるものだが、殷墟の位置などからも、黄河は古来北流だったことが分かる。黄河は、豊かな水と土壌をもたらす恵みの川であり、かつ恐ろしい破壊をまねく暴虐な存在でもあった。人々は黄河を河神として祭り、信仰の対象ともした。長江・淮河・済水とあわせて「四瀆」として、重要な河川と位置づける考えも、漢代頃の成立かと思われる「爾雅」に既に見られる。こうした、「中国を代表する大河」のイメージは、周・漢・唐などの時代を通して繰り返し再現され、多くの詩文などにも読まれて再生産されていた。

その後唐代くらいまでは、黄河は比較的安定していたが、北宋時期に入るとしばしば決壊し、洪水を引き起こし、迷走を始める。そして、北宋が滅亡して宋室が南渡する際（一一二七）、宋王朝側は金軍の南下を防ぐために、黄河の南側の堤防を人為的に決壊させた。ここから本格的な南流が始まる。しばらくの間は北流と南流の双方があったが、やがて北流は途絶し、淮河と合流して海に注ぐ南流の

みとなった。しかし、その後も河道は安定せず、また幾筋もの流れが並存してもいた。この頃の実際の黄河の姿は、「大河」と呼びうるものではなく、長江と肩を並べるレベルには無かったものと思われる。しかし、唐代までに形成され定着していた「大河黄河」のイメージは消えることなく続いてきたものと思われる。南宋以降の、黄河の実際の姿と人々とのイメージとの間には、ギャップが存していたのである。

さて、徐霞客の頃の黄河下流はどうだったか。元代末に、賈魯という人物が南流する黄河の河道を安定させる一大治水事業に取り組む。彼はかつての下河（下渠）のあとを利用した。下河は、「南北の水運を繋ぐ交通幹線」（青山定雄）であり、長江沿岸と黄河沿岸とを結ぶものであり、運河としての整備もされていた。例えば、入宋僧の成尋は、浙江省の天台山を発つと、淮河・下河を通って、開封に至り、その後五台山に向かっている。すなわち北宋時代では、黄河から下河を経て、淮河を通って長江へ出るのが水路の動脈としてあったわけである。元代の賈魯はこの下河の旧河道を浚い、南流する黄河の主流としたわけである。これにより、黄河はやや安定したという。すなわち、元代以降、清末に至る間の黄河の河道は、東流して開封あたりへ至ると、東南へ向かって南流し、旧下河の河道あたりを流れて淮河に合流し、海に注ぐというものだったのである。

この状況が解消され、黄河が北流し、しかも長江と並ぶ「大河」とよびうる大きな流れになったのは、前述のように、清末、十九世紀のことであった。

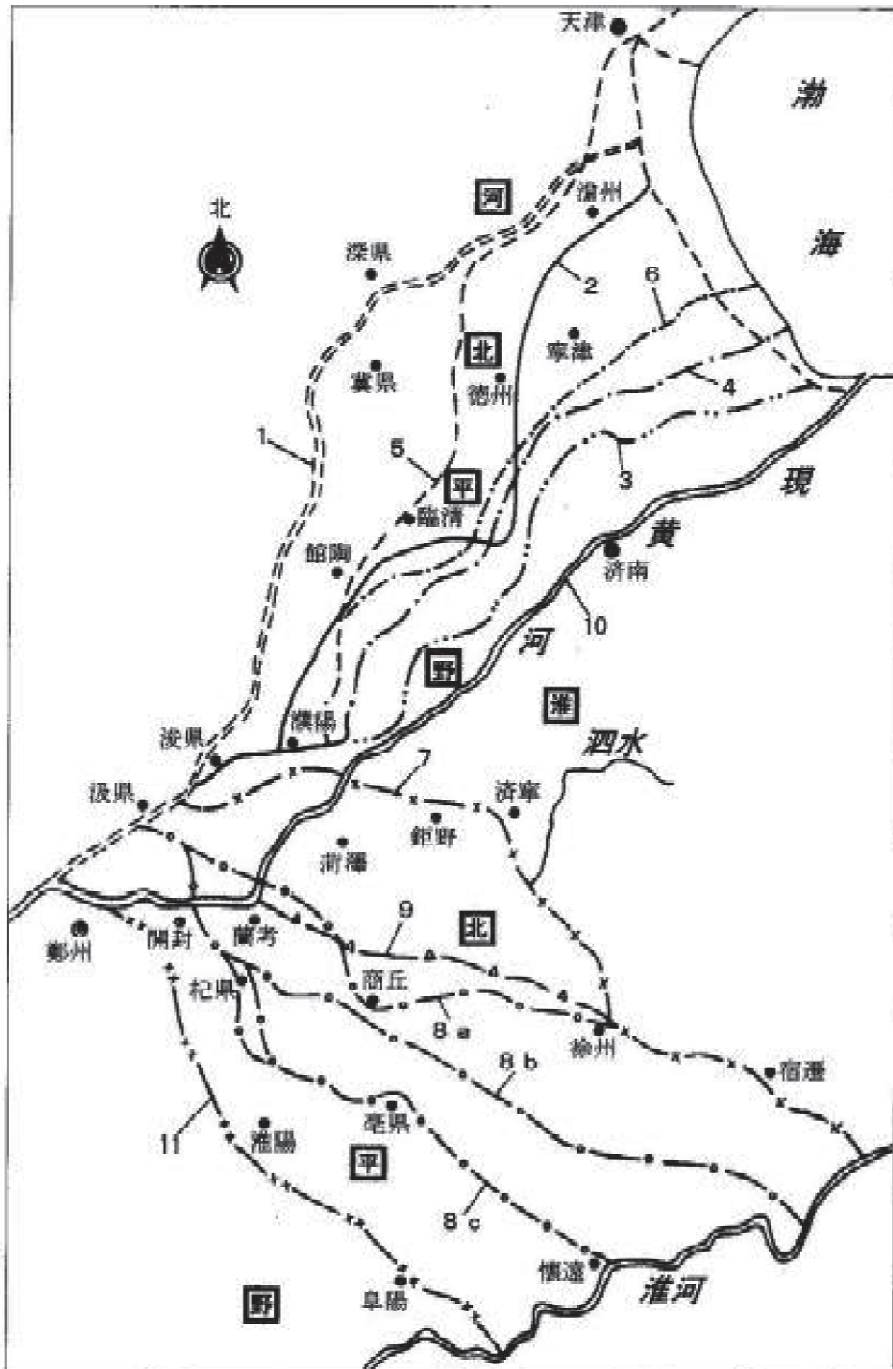


図2 黄河下流河道变迁图

(尹学良1995の挿図をもとに作成)

- 1—前602年以前 2—前602～後11年(春秋戦国～新) 3—11～1034年(新～北宋) 4—1034～1048年(北宋「横隴河」) 5—1048年(北宋) 6—1060年(北宋「東派」) 7—1128年(南宋初) 8a・b・c—1234年(金滅亡時) 9—1351年(元・賈魯河)・1579～1855年(明・潘季馴の河道) 10—1855年～現行黄河 11—1938～1947年(国民党による決壊)

#### 四 補説一 王士性「地脉」訳注

徐霞客に先立つ万暦年間に、客観的で大部な地理的著述を残したものに王士性という人物がいる。字は恒叔、号は元白道人、浙江臨海の人。嘉靖二十六年（一五四七）〜万暦二十六年（一五九八）。万暦五年（一五七七）の進士。性、遊歴を好み、五岳をはじめとする名山を経巡って「五岳游草」を著述した。晩年には遊歴した土地について考察をめぐらし、「広游志」「広志釋」という地理に関する論文集をもした。その論文のひとつである「地脉」と題する一文は、大河と龍脈を論ずる点で、「溯江紀源」と通ずるものがある。そこでここで訳出して、補説とする。

「地脉」を含む、王士性の「雑誌」は、「五岳游草」に巻十一・十二として収録されているものと、「広志釋」の末尾に附載されているものとの二種類がある。「五岳游草」は、筑波大学図書館に万暦十九年（一五九二）自序・同二十一年（一五九三）屠隆序のある鈔本があるが、刊本としては康熙三十一年（一六九二）の序文のある馮甦重刻本がある（「四庫全書存目叢書」所収）。「広志釋」は康熙十五年（一六七六）刊行がある（同じく「四庫全書存目叢書」所収）。

ここでは、「広志釋」所収のテキストを底本とし、馮重刻「五岳游草」所収のもの（馮刻本）を参照してテキストを確定し、訳出した。紙幅の関係で、校勘記と注は省略し、口語訳のみとした。

#### 王士性「地脉」訳注

##### (一) はじめに―問題提起

昔から雍冀河洛の地を中国とし、楚吳越を夷狄の地としてきた。ところが今や名士や文人たちは、逆に東南地域が盛んであるとされ、黄河流域の地がやや見劣りがしている、それはなぜだろうか。

ある人がいった、それは天の運行も循環するように、地脉も移動する。あれとこれとが栄えたり衰えたりするということわりだ、と。私もこれはもつともなことだと思う。では天地などが栄えたり衰えたりするということのわけはどういうことなのか。このことを知ることを知りてみよう。

##### (二) 三大龍脈と支脈のあらまし

昔から、風水を唱えるものはみな次のように言う。

「天下の山川は、崑崙山から起り、三つの龍に分かれて中国に入ると。」

彼らは三龍のことは言っているが、その盛衰のことわりについては述べていない。思うに龍神の進行は、水によって断たれる。しかし深山大谷についてあまねく歩いて調べてまわることではできない。そこで水脈を調査することで山脈を知ることができるのだ。崑崙山は大地の中心にあり、その四方の山麓はそれぞれ中国僻外の地にある。そこから中国へ入ってくるのは、東南に延びた一支脈である。

その支脈は、塞外の段階でさらに三つの支脈に分かれる。

北の支脈は夷狄の地の陰山・賀蘭（陝西）をめぐって、中国の山西に入り、太行山脈となつて数千里にわたり、壘巫問山（山東遼東）となり、遼東へ進んで止まる。これが北龍である。

真ん中の支脈は西蕃の地をめぐって、中国に入ってから岷山に向かい、岷江に沿ってその左右（北南）を挟みながら進む。岷江の右（南）側に出るものは、叙州をめぐって止まる。岷江の左（北）側に出るものは、北へ進んで関中に向かう。その支脈は大散関を通り、渭水と漢水の間を進む。両川の間から出ると終南山・西岳華山となり、秦山へと下りながら中岳嵩山を起こし、右（南）へ荆山の方へ転じて淮河を抱き、左（北）へと平野部へと下ることが千里、泰山を起こしてから海に入る。これが中龍である。

南の支脈は、チベットの西から出て、麗江を下り、雲南に向かい、霑益・貴竹・關嶺をめぐって東に進んで沅陵へと進む。そこから一支脈が分かれて、武岡山を経由して湘江に出て、西に進んで武陵の地に至って止まる。また一支脈が分かれて、桂林・海陽山を経由して九嶷山・南岳衡山を過ぎ、湘江に出て、東に進んで廬山に向かつてそこで止まる。また一支脈が分かれて、庾嶺を過ぎ、草坪を通り過ぎて黄山・天目山・三呉山に至って止まる。庾嶺を過ぎる者は、そこでまた仙霞関へ向かう支脈が分かれ、福建に至って止まる。それは衢州でまた支脈が分かれて大盤山となり、右（南）へ括蒼山へと下り、左（北）に進んで天台山・四明山となり、海を渡って止まる。これらはすべて南龍である。

宋儒たちはこういう、「南龍と中龍とはどちらも岷山から発して、長江に沿って二つに分かれる」と。思うに宋代は四川の大渡河を防衛線としており、雲南の地は放棄していた。だから当時の士大夫で、四川より奥に入ったものはいなかったのだ。だからものがよく分かつた、憶測して付度したのだろう。今や金沙江の源がチベットの犁牛河より出ており、雲南に入って諸川を下っている（のが分かつて

いる）。つまりすでに塞外の地において脈が存在しているわけで、それは岷山より遠く隔たっている。だから南龍は岷山から起こったのではないのだ。

### (三) 龍脈と王氣の変遷

古今、王氣は、中龍が最初に発して、最も盛んであつて長期にわたった。北龍がこれに次ぎ、南龍は初めの方は発していなかったが、宋が南渡してから発し始めた。そして長く続き、ときどき途切れることがあつた。あとから新しく発するものは、当然盛んになつていくことは疑う余地がない。何によつてそうであるのが分かるか。

天地が開闢してから、伏羲は陳に都を定め、少昊は曲阜に都を定め、顓頊は牧野に都を定めた。周は后稷以来、岐山の麓の豊と鎬に起こり、周公・孔子といった聖人・賢人を生んだ。秦もまた関中の咸陽に都を定め、漢もまたこの地の長安に都を定め、唐もまた同じく長安に都を定めた。（北）宋もまた、黄河中流域の汴京に都を定めた。だからいうのだ「中龍が先ず盛んであつて長きにわたつた」と。

五帝のはじめである黄帝は涿鹿の地から身を起こし、堯は平陽に都を定め、舜は蒲坂に都を定め、禹は安邑に都を定めた。その後の時代は、北辺の塞外の地で王氣が発した。獫狁・冒頓・突厥は夷狄の王として栄え、さらに後の時代には、遼と金、また元に至るまで、中国の地において主となつた。だからいうのだ「北龍がこれ（中龍）に次ぐ」と。

南方は、呉の太伯や越の時代は、まだ「髪はざんばら、身には入れ墨」の野蛮な地であつた。楚国では、春秋時代になつてもなお夷狄の服装をしていた。やがて、三国の呉・東晋・南朝諸国は、すべ

て建康（南京）に王朝を建てたが、中国全体から見れば片隅に偏っていたに過ぎない。また百年にわたって存続できた主人もいなかった。宋の高宗が南渡するに至って、百年あまり王朝が続いた。我が太祖様はやっと天下を統一したばかりであった。だから「南龍の王気がちようどはじまろうとしている」というのだ。

ある人が言う、「雲南・貴州・広東・広西はすべて南龍である。しかし、南龍の東南地域だけで王気が盛んで、雲南などの西南地域では王気が盛んでないのはなぜか」と。

答えて言う、「雲南・貴州・広東・広西はすべて龍脈が通過している土地である。以前に記したところだが、南龍には五つの支脈があつて、一支は武陵・荆南で止まり、一支は廬山で止まり、一支は天目山・三呉山で止まり、一支は浙江で止まり、一支は福建で止まっている。これらの支脈はいずれも江河潮海に遭遇したところで止まり、前に進めなくなつたので、必ずその場所で王気が吹き出し踊りあがつていて、すぐに収めることはできないのである。いま東南の地で王気が盛んなのはこう言いわけである。

しかし東南の地は王気が盛んであることが久しく、その勢いはやがて雲南・貴州・百粵といった西南の地域に転じないわけにはいかないだろう。それは、ちようど樹木の花が咲くのは、必ず木の梢からはじまるのと同じである。樹木の本体が盛んであつて、花を咲かせる気が尽きていない場合、やがて太い幹の方に気が転じてきて、横溢してつぼみをなす。薇や桂などの花はみなこうである。山川の気は、どうして花木と異なるだろうか、いや同じだろう。

だから中龍は先ず脈の梢の陳や曲阜で盛んになって、のちに幹の関中に転じた。北龍は先ず梢の涿鹿や晋陽で盛んになって、のちに

幹にあたる塞外の地に転じたのである。今は南龍は梢である呉・楚・閩・越で盛んであるが、後日幹である百粵や夷狄の地に転じないことがあるだろうか。いやきつと転じるだろう」と。

ある人がいう「齊魯も中龍の末である。しかしこの地では、周公と孔子の後に、聖人や王者は生まれなかった。それは先輩の中に優れた士人が多く集まつたからだろうか（そのためによい気が尽きて、聖人が輩出できなくなったのだろうか）。

答えていう、「その通りである。しかしまた、黄河が地脈を流断したがためでもある。黄河の流れは、周・秦・漢の時は、すべて河間を通つて海に入つていた。河間とは、禹が開いた九河の間である。だから齊魯の地は中龍の上にあつた。ところが隋の煬帝は江都に行幸し、黄河を汴水に引き入れた。これ以後、黄河の水路は淮水にゆだねられることになつた。そこで齊魯の地脈の流れが隔絶されようとしたのである。それでもなお泰山が海東の地で塞護していたため、王気が絶えてしまうことはなかった。だから齊魯の地より、列侯・将相・英賢は盛んに輩出したのだが、聖王は遂に興こらなかつたのであろう。思うにこういうわけであろう」と。

「そうであれば、我が皇朝の王気はどうであろうか」と。

答えていう、「すべて前代の比すべきものはない。前代の龍気は各王に一支脈が対応していただけである。それに対し、我が皇朝にあつては、鳳陽府泗州の熙祖・仁祖を祭つた陵墓は、靈妙な王気が中龍の流れに集まつたところであり、更に留都である南京も王業が、南龍の下流に結実したところである。今の都である北京（原文「長安」）の宮闕や陵寝も、北龍が進んでいく先払いの役割を担っている。このように我が王朝は三大龍脈を兼ね備えており、どうして一万年に

及ぶ命脈を保たないことがあるのか、いやきつと命脈を保ち続けるだろう」と。

以上のことについては、私は「送徐山人序」において言及していたが、詳しくは論じていなかった（そこでここであらためて詳述する。）

#### 注

(1) 本稿では、紙幅の関係上、口語訳と簡単な注とした。詳細な訳注は、ウェブサイト上で公開する予定である。

(2) 徐霞客遊記の刊本に附載。稿者による訳注がある。「徐霞客遊記訳注稿 資料篇(一)――陳函輝『霞客先生墓志銘』、『埼玉大学紀要(教育学部)』(六三卷二号、二〇一四)。

(3) 徐霞客遊記の刊本に附載。

(4) 「墓志銘」や後述する馮士仁の序文によれば、「溯江紀源」は陳函輝本人が県令をつとめていた靖江県の県志と、友人の李令哲が県令をつとめていた江陰県の県志に刻入された、という。陳函輝刊行の明刊「靖江県志」は、いまのところ日本での所在は確認できていないが、「江陰県志」の方は、「崇禎」江陰県志」が、美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏中文善本彙刊に入っている(東京大学東洋文化研究所等蔵)。

(5) この節は、主に、濱川栄『中国古代の社会と黄河』(二〇〇九年、早稲田大学出版社)「第二章 黄河変遷史概観」「第一節 黄河変遷史通観」による。下河については、青山定雄『唐宋時代の交通と地志地図の研究』(一九六三年、吉川弘文館)「第一篇 唐宋時代の交通」「第六 唐宋の下河」による。

(二〇一六年三月三十日提出)

(二〇一六年五月十日受理)